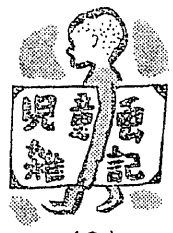
暗い色を使う子
画に現れる親の愛情



（2）

「黄色いからす」という映画が大天地で上映されたことがあつたがあれは子供の感情が色に表現されることをテーマにしたものであつて、父親が外地から引揚げてきたことによつて、子供が不幸を感ずるようになるのであるが、それが画に現われて黒と黄とを組合わせた画をだんだん描くようになる。あの映画では、黄色が美しかつたがあれは光線のせいだろうと思つた。ほんとはそんな場合の黄色は薄よごれたきたない黄色になるはずだと思う。こんな風に黒と黄のよごれたさびしい画を描く子供はどこの学校にも必ず居るものである。たいていは父親の愛情がゆがんでいる場合が多いと云われている。自分がもと学校に奉職していたとき、ある子供の描く画が大体明るい色調であつたが、少しづつ暗い色の茶色とか黒味がかつた色合いによごれてくるようになつて雑便い（タッチ）もだんだん荒つぽくなりいらいらとした画面に変化してきた。そして、後にはハツキリときたない土色の黄色と黒との組合わせられた画を描くようになつてきたので家庭の事情をそれとなく探つてみると、父親に愛人ができて、つまり家庭の中が夫婦のいがみ合いに明けくれするようになつたわけである。その後その子の画にはいくらかづつは明るさが返つてきたが、やはり何となくいらいらしたタッチとよごれた色とさびしい色調は以前のように回復せずに終つた。そして家庭でも乱暴になり、子供同志遊ぶときにも目立つて衝動的になつてきた。

またある二年生の子供は、兄がたいへん強い子で子供なかまでのボス的な存在であり、父親も社会的に活動力の旺盛な人で人をたくさん使う強い性格の人であつたがそういう強い性格の父親や兄たちから毎日精力的にポンポンしかりとばされつづけているので、その子の顔は暗くて人の顔色ばかりぬすみ見をするいじけたしなびた表情であつて、彼を見るたびに自分は重たい石に抑えつけられた薄物の野菜を連想した。その子の描く画はいつも暗い色が多くて、明るい色はあまり見たことがなかつた。うすよごれた黒や茶色の画は、そんな子供の場合は愛情に飢えているといわれるがたしかにそうであつた。あるとき彼が描いた画は真ん中に一人の男の子が描いてあつた。顔色は暗い土色で表情はいじけてゆがんでいた。それは不思議なほど彼自身の顔そつくりであつた。色彩はきたない緑色の乱雑なタッチで満たされていたが、そんな場合は赤ちゃんがウンコやオシッコによごれてお母さんからふいてもらつているので、自分もあんなぐあいに可愛がつてもらいたいという願望から、よごれた緑色を使うそうであるが、そんな子は寝小便もするそうである。彼のうちには赤ちゃんもいた。

「そんな画の中の一人の子供は孤独でさびしい自分自身であるといわれるがその通りの典型的な画だと思つた。彼はよく家から出てきて一人ぼつちで学校の運動場で遊んでいることがあつた。恐らく彼は寝小便をしているのであろうが気の強いお母さんは受持教師の私に決していわなかつた。彼の将来はどうなるであろうかと今もときどき思い出す。

（家永勝之亮　維持は教育研究所嘱託、土曜会研究所）

江田夫婦が薄板張りの内職をはじめてからもう半歳が経つた。

炭住の一棟五軒の、うす暗い四畳半と三畳の部屋いつぱいに、張り上つた薄板を、乾かすために並べているので足の踏む場もない。そのまんなかに蹲いた小さな机に向つて、新吾は懸命に作業を続けているのである。

「あんた早いものね、二人でこれを始めてからもう半歳になるわ…はじめは馬鹿らしいようなものだつたけど、だんだんなれてくると能率（はか）がいくし、お面白いくらいだわ…」

妻の芳江が、夫の張り上げた薄板を受取り、一枚一枚丹念に拡げながら、しきりに話かけるのだが新吾は返事のひまもせわしそうに手先を器用に動かしているのである。

「おかげで、子供たちのお小遣いも不自由しないし、お正月はどうやら泣かずに過ごせそうだわ」「暫くおやすみになつたら…」

そう云つた芳江は、感慨深そうに深い息を吐くのであつた。

「ウン」「早いもんぢやなー。どうやら借金も減つたし、もう一息ばい…」

遠い所を見るような恰好で、フーツと、大きく背伸びした新吾はこう云つてまた机に向うのである。

新吾にとつては、妻の言葉のひとつひとつが身にしみていることばかりであつた。なぐられてもどなられても黙々として頑張つてくれた妻、自分をここまで引張つて来てくれた妻、手をとつて戒きたい想念が湧上るのである。有難いと思つた。

まん頭やお菓子の包みに使うこの薄板張りの内職は、決して楽な仕事ではなかつた。いまでこそ二人が稼出してやれば、一日に八百枚位張れるのであるが、初めのころはやつと三百枚が精いつぱいであつた。

一枚出来上りが二十銭だから、六十円にしかならなかつた。そのうえ材料に使う麦粉糊は自分持である。

薄板工場から持つてくる材料は容器の底の部分とふたになる部分が一コに二枚あてで、継ぎに使う紙との三つに分れている。工場から預つている製作板の上に、底板をのせ、両端に糊をはき、ふたの部分を両端にはり、その上に糊で紙をはりつけて出来上りであるがこれだけのことが、つづけていると、とても身体にこたえ、腰や肩がひどく痛んだ。身体の疲れと気苦労の割には能率（はか）がいかず、金にならないので、何度か投出そうかと云つたが、妻の芳江が慰め励して、やつと続けてきたのであつた。

×

新吾は坑外勤務であつたから、給料は少かつた。もつとも以前は坑内で腕の良い先山であつたから収入も多かつたが、岩盤掘進の仕事が崇つてけい肺と診断され、坑外へ職場転換になつたのである。それまでは三交替で仕事もひどかつた関係で、ろくに遊びごともやらなかつたが、坑外に移つてからは常一番の仕事はさほどなく、けい肺といつても自覚症状の少い彼は、パチンコに熱をあげ始めた。仕事帰りに遊んで、帰宅するのも十時、ときには十一時とおそくなり、そんなときに限つて負けているのであつたが、それにもまして疲労がひどく食欲もなかつた。

ときたま勝つたときは、キャラメルや、鰹入りのドロップの景品を子供たちに持つて帰つたので二人の子供達は「ワーイ、お父さんはうまいんだね」とはしやぎまわつた。

新吾はうれしそうに眼を細め、声も活気に満ちて、百十三番がどうだとか、今日は二台終了させていくら勝つたんだなど、とめどなく芳江に話して聞かした。

「たまにはパチンコもよいですがいつぺんうちに帰つて、子供たちと一しよにご飯を食べてから遊びに行つたら…」

、芳江が、彼の身体を心配しても「ウン、ウン」云うだけで、あくる日はまた夜遅くしよう然と帰るのが常であつた。

そんな状態が半歳一年と経つた芳江は夫の身体を考えると、無理も云えず、自分の力で出来るだけでもと考え、薄板張の内職を頼みに行つたりした。

新吾は、芳江の心配をよそに、

それからの新吾は前にもましてパチンコに耽るようになり、仕事は休み、果ては酒に酔つて帰る夜が多くなつていつた。

酔つてすべてを紛らわすことが彼の行動の中で唯一つの逃避であつたろう…。

「誰がどげん云うたつちゃー俺アパチンコは止めんぞツ！」

「パチンコ止むるときア死ぬときたア！」

「バカモン！どこのどなたでん連れチコイツ！」

こんな悪態をとめどなく喚くときの新吾は、けい肺二症度の病状を暗示するかのように、吐く息がビユツビユツと、のどにつかえもん絶するのであつた。

地域分会長の山田が、彼の健康と家庭を気づかつて諄々と話すと根が正直者の新吾はそのときだけは判つたような顔をして引下つたが、酒が入ると決つて喚きちらすのであつた。

このような状態が続いたので生活はすさみ、米代はおろか、子供の小遣いさえやれない日が多くなつた。

こんなこともあつた。昼間から酒をのんだ新吾が、いつになく酔払つて帰つた。丁度紙芝居が来ていたので、一年の女の児が芳江に五円くれとねだつていたが、五円はおろか、一円の金さえなかつた芳江は胸を締つけられるような気持で、今度来たときは上げるからと訓すのであつたが「イヤンイヤン」とあきらめきれない子供は泣いてねだつた。

このとき、矢庭に立上つた彼は泣いている子供のほほをぶんなぐつた。子供はひとたまりもなく転倒して火がついたように泣き出した。泣声に激怒した彼は、子供をつかみ起すと、コヤツがコヤツがと喚きながら、ところ嫌わず非情なまで殴りつけた。近所の者がかけつけて抱きとめたのでおさまつたが、子供は苦痛と恐怖のために筋がつり、医者がかけつけて大騒ぎになつた。

芳江は夫の狂体にぼう然となつて哀しんだ。

そのころから、芳江が頼んでいた薄板の内職がやれるようになつたのではじめたが、仲々思いかなかつた。それでも一日座つていれば、家事の片手間に二百枚は張れたので、学供たちの小遣いにはこと欠かぬようになつた。

始めのうちは、夫の眼にふれぬように気を配つたが、ある日ぶらりと帰つた新吾は、薄板と妻を横眼でにらんで怒鳴つた。

「なんだそりやツ！」「お前ヤいつから、まん頭屋になつたつかツ！」「フン！そげんこつばしたつちやいくらがツなるかツ！」

「子供の小遣いでも、と思つたから…」

芳江はおだやかに云つた。新吾は「ナニオツ」と云つたが、それきり黙つた。芳江は取合わなかつた。

それから一週間ばかり経つたある夜、遅く帰つた新吾が、いつものように部屋に入ると、火の気のない冷たい部屋で、芳江と五年生の正夫が、一心に薄板張りを続けている姿を見た。暫く突立つたままでいたが、黙つて自分の床の中にもぐりこんで身動きもしなかつた…。

―新吾は部屋に入つたとき、一瞬、ぼう然とし、ジーンと強いものが身体のなかを突抜けていつた新吾は床の中に顔をうずめ悔恨の涙にくれながら「今ごろパチンコする奴ア馬鹿バン」と云つた同僚の中村のこと。「機械の調節が自由にできるエンジニヤがいて、その日その日で調子が変る」と云つた田中。「お客から捲上げた金の何百分の一をある客に出すだけで所謂右から左の流通過程でボロ儲けをやつているのがパチンコ屋だパチンコやる金があつたらドブの中に投げこんだ方が、余つぽどサバサバする」と、極言した悲憤な神林。こんな同僚の言葉を反すうして見て、自分の誤りであつたことがしみじみと感じられるのであつた。

この一、二年の間、新吾は何度か止めようと思つたか知れなかつた。しかし金を摑ると、たとえそれが他人の金であつても、パチンコに注ぎ込んだ。自分の意志の弱さを自嘲しながら、一人しよう然と帰る道で、冷雨に降られるときもあつた。そんなとき自分の頭を拳でたたきつけながら、ようし、今度こそパチンコは止めるぞ、という想念と、いやいや負けた金を取返さずにおくものか、という報復的執念が交錯して、彼の心は格闘を始めた。そしていつも決つてもう執の方が克つた。

新吾は床の中で、今度こそどんなことがあつても立上るぞ、と堅く堅く心に誓つた。以後新吾は別人のように変つた。芳江の辛苦が初めて実を結んだのである。

×　×

早い、あれから半年経つた。辛かつた内職も漸くなれて能率（はか）がいつた。会社も満勤である。夕ご飯を子供達と過すよろこび。ご飯が済むと早速机にかじりつく彼の手先は始めたころのそれではなく、逞しようである。

そばで絵本を見ていた一年の清子が、不意に「お父ちゃん、今日の紙芝居ね、〃コンニヤク玉と出目チャン〃面白かつたヨー」

うん、うんそうか、そりやよかつたな…。

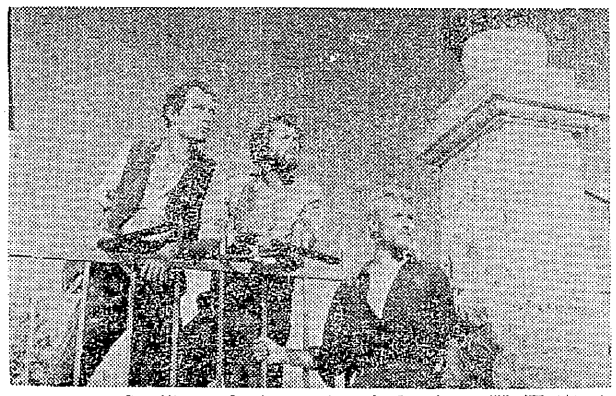
新吾はまた仕事を続ける…。芳江は心から思つた。この和かな雰囲気を何年か前に還したいと…。

選評
野間宏

「彼の内職」（山口正勝）

けい肺で坑外勤務にうつつてからパチンコにこり、家庭生活をめちゃめちゃにしてしまつた労働者を描いている。がこれだけでは内職がすべてを解決したという成行きになつてしまうだろう。

窮極における人間探究
佛映画　宿命



極限にまで追いつめられた人間の良心の問題を真正面からとりくんだ力作で、キリストの現代における再生という寓話めいた設定をかりて、人間存在の大きな矛盾と闘争とを描いているので、一面象徴的でありながら、しかも強く写実的で政治的できえある傑作。

戦争が終つてやつと安定したこの村の平和な生活をかきみだすような事件が起つた。

フォチス神父にひきいられたギリシア難民の一団がこの村にやつて来たのである。トルコ軍の侵入に際して抗戦したため村をりやくされ、食もなく、安住の地を求めて流浪の旅を続けていたのだが、豊かに暮している同胞を発見した彼らはその村に入れてもらうことを頼みこんだのである。だが、グリゴリス神父は彼らの要求をはねつけた。村に入ることを拒否された彼らは村のはずれにそびえ立つサラキナの山の中腹に野宿しなければならなかつた。飢餓と疲労はますます難民たちを苦しめた。

老人が、嬰児が、次々に死んでいつた。そんな彼らの悲惨な有様をそつとうかがつている者があつた受難劇のキリストであるマノリオスとその使徒たちだつた。彼らは禁令破り期せずしてこの山に登つて来たのである。この同胞たちはコレラではない。飢えているのだ……。男たちに媚を売つて生活していた寡婦のカテリナすら隣人愛に目覚めて行つた。思い余つたマノリオスはミケリスの同意に力を得て、グリゴリス神父とミケリスの父親パトリアルケアスに、飢えた難民たちを救うことを訴えた。だが、二人はかえつてこの若者をさんざんにこらしめた。

【16日より大牟田名画座で上映】

長屋太郎記
中村かめお